

言語の普遍的特性

——語順，膠着語，屈折語に焦点を当てて——

梶原秀夫

0. はじめに

言語の普遍性 (universality)⁽¹⁾ については多くの研究者たちによって様々な角度から論じられてきている。諸言語を比較すればたしかにどこか似通っている面があるのは事実であるが、すべての言語に当てはまる具体的な例を提示するのは難しい問題である。例えば語順 (word order)⁽²⁾ についてはどの程度まで普遍性のことを当て嵌めることができるのだろうか。Bloomfield⁽³⁾ は世界のどの言語も何らかの意味を表現するにはその配列 (arrangement) に関係しているとし、用語としては順序 (order)、抑揚 (modulation)、音修正 (phonetic modification)、選択 (selection) などの用語を提示している。たしかにこれらの配列の中で順序を意味伝達のために活用している言語はかなりあると言える。ここでちょっと英語と日本語を対照的に考察 (observe) してみると以下のように分析されよう。

例えば日本語の単語が書かれているカードが三枚あるとして、さらにそれぞれのカードの単語が「太郎」、「花子」、「愛している」という文字であるとしよう。そして誰かにそれら三枚のカードを示してどのような意味化が可能であるかを質問してみてください。その質問に答えた人が、「太郎」・「花子」・「愛している」という語順を示したとすれば、普通の語順からくる意味は「太郎が花子を愛している」となるであろう。しかし日本語は格助詞⁽⁴⁾のつけ方によって意味が変わってくる。語順が「太郎」・「花子」・「愛している」と上記と同じでも、格助詞の「が」と「を」の順序を「を」と「が」に変えると、「太郎を花子が愛している」というように異なった意味化が可能になる。日本語では文 (sentence) の意味化に格助詞 (case particle) が非常に大きな役割を演じているのが理解されるであろう。つまり日本語の意味化には語順というよりも場面における格助詞の使用が大きく関係しているのである。

それに対して英語の語順 (word order) は、例えば三つの英語のカードを「John」・「loves」・「Mary」とすると、「John loves Mary」と「Mary loves John」の二つの意味化が可能である。しかもこれは日本語と違って語順が意味化に大きく関係している。「Who loves who?」という質問に対して二通りの答えを用意することができる。「主語の優先性」⁽⁵⁾とでもいうか、とにかく先に置かれた名詞のカードの方が主語になれるのである。ただし、文中の主語

は「他動詞よりも前にある」ことが必須条件になっている。このような英語と同じ語順を有する言語には、それが膠着語で格助詞のような用法を持たない言語なら、意味化という点で全く同じような分析が可能となろう。つまり意味関係を明確にする格助詞 (case particle) のような助詞 (postpositional particle) が名詞につく膠着語 (agglutinating language) ではないという前提条件をつけるならば、言語には語順による意味化の普遍性があると言えるだろう。

しかし「普遍性」(universality) という用語は、いくつかの事柄に同じことが言えるということではなくて、本来はすべての事柄に対して同じことが考察された場合にのみ使用すべき用語ではないだろうか。もしそうでないならば改めてそのように定義しなければならないと筆者は考えている。ところが現実には必ずしもそのようにこの用語は使用されてはいないようである。全体に対してではなく、一部の範疇 (category) の場合にも条件つきで同一性が考察されると、この「普遍性」(universality) という用語は具体的な普遍性を示す「普遍的特性」(universal) という表現で頻繁に使用されている。それが「普遍」という用語の正しい使用方法であるので、このような用語の使用方法は筆者も認めている。筆者は常に用語の使用には非常に神経を割いていて、これまでの論文でも用語の定義をする場合が非常に多く、そのために使用する用語がどのような意味であるかを常に括弧内に英語の訳語を入れて使用するようになっている。例えば「言語習得」(language acquisition) と「言語獲得」(language acquisition) とか、「状態」という用語は「静態」と「動態」の意味を有していることなどがその例である。読者諸氏にはこのような記述方法は時には冗長的で必要悪のようにお感じになられるかもしれないが、用語を正確に使用したいとする筆者の考えをどうか容認していただけるよう改めてお願いしておきたい。

そこで話を戻して、例えば Greenberg (1963) の考察 (observation) によると、世界の言語の語順は理論的に考えた場合、それが平叙文であるとするならば、主語 (S)、動詞 (V)、目的語 (O) の語順は SVO, SOV, VSO, VOS, OSV, OVS などが可能であり、主流は SVO 型と SOV 型で VSO 型は少数派であるとまず分析している。そこで「普遍的特性」(universal) という用語を用いて、各言語の語順に対して類型論 (typology) 的には7個の普遍的特性を考察している。そして統語論 (syntax) 的には18個の普遍的特性を考察し、さらに形態論 (morphology) 的には20個の普遍的特性を考察している。これほど多くの普遍性 (universality) を考察している言語論は他に類を見ないほどである。ではこのような「普遍的特性」(universal) という用語を用いて日本語と英語を対照的 (contrastive) に考察した場合に、一体どのような普遍性 (universality) が見出されるであろうか。

本小論文ではまず初めに「言語学」(linguistics) という用語を再確認し、同時に普遍性を追求する「一般言語学」(general linguistics) という用語についてもその定義はどうなっているのかを論じてみたい。次に同じく言語学分野に入っている「対照言語学」(contrastive linguistics) という用語の定義についても再確認したい。さらに類型論 (typology) 的に「膠着語」(agglutinating language) と「屈折語」(inflectional language) の本質的な異同は何

かを考察し、最後に「後置詞」(postposition)と「前置詞」(preposition)の膠着的特性を論じて類型論的に見た言語の「普遍性」(universality)について筆者の新説を提示したい。

1. 言語学 (linguistics) について

言語学 (linguistics) という用語の学問がソシュール (Saussure) の構造的な言語分析によって生み出されたことは誰もが承知していることである。それ以前までは文献学 (philology) という用語がそれに代わる役目をしていたが、それは主に通時的 (diachronic) ⁽⁷⁾ な研究が主であって、つまり言語の歴史上の変化に焦点を当てた分析方法であったのを、言語分析はその時点で同時に構造分析した方がより現実的かつ効果的でもあるという観点から今日の言語学が誕生したと言える。

たしかに19世紀頃に隆盛であった言語の音変化 (phonetic change) の規則性に対する研究は、言語学用語の比較言語学 (comparative linguistics) や歴史言語学 (historical linguistics) を産出し、英国人のジョーンズ (Sir William Jones) や青年文法学派 (Yunggrammatiker) たちの印欧語 (Indo-European) の音韻論 (phonology) 的分析は多くの言語研究者たちの興味を喚起させたと言える。それは音韻論上の普遍性の追求であったとも言える。人間の発音が人種などによって発声器官に大きな差があるのであれば音韻上の規則的な考察は無駄であるけれども、つまり極端に言い換えるならば母音という発音がまったく無い言語を話す人種が存在しているならば話は別であるけれども、上記の青年文法学派たちによる通時的 (diachronic) な音韻変化 (phonological change) の規則性に対する考察は、言語学という学問の立場からは言語の普遍性追及の研究であったと言えるだろう。

さらに20世紀になってからは Saussure の共時的 (synchronic) な言語分析が脚光を浴びて言語学 (linguistics) という学問が誕生する。共時的な言語学には一般言語学 (general linguistics)、対照言語学 (contrastive linguistics)、心理言語学 (psycholinguistics)、社会言語学 (sociolinguistics)、応用言語学 (applied linguistics) などがあるが、ここでは一般言語学と対照言語学について紙面を割くことを許されたい。

1. 1 一般言語学と対照言語学

一般言語学 (general linguistics) とは一体どんな言語学なのであろうか。言語学を専門とする方々はなんと幼稚な問いかけをするのだろうかと思うかもしれないが、ここでの問いは他の言語分析なくして一般言語学は独自に存在できる学問なのであろうか、ということである。つまり一般言語学はたった一つの個別言語だけの考察で成り立つ学問なのであろうか、ということである。別の表現をするならば、対照言語学的な分析方法を用いないで成り立つ学問なのであろうか、ということである。そこでこの疑問を検証するために、まずこれらの用語はどのように説明されているかを言語学辞典から以下に引用することを許されたい。

[一般言語学の説明]

現代言語学辞典（成美堂：1988，PP.243—244）

日本語や英語のような特定の個別言語の研究ではなく、理想的にはすべての人間言語に共通する現象、あるいは少なくとも数多くの系統的に無関係な言語にまでまたがってみうけられる現象の研究を、総称したもの。国語学・日本語学・英語学などの「個別言語学」に対する。例えば、記号の恣意性 (ARBITRARINESS)・人間の言語の線条性 (LINEARITY)・二重分節性 (DOUBLE ARTICULATION)・創造性 (CREATIVITY)などは、すべての言語に共通する特徴なので、一般言語学の中心的主題となる。このような意味では、普遍文法 (universal grammar) やそれに近い意味での一般文法 (universal grammar) とほぼ同義であるが、文法面だけでなく音声面・語彙面・意味面などと共通する現象も扱えるもので、一般言語学の方がより広い領域を含むことになる。さらに、わが国でよく使われる「言語哲学」「言語本質論」などとも内容が重複し、言語理論 (linguistic theory) や論理言語学 (theoretical linguistics) とほぼ同義といえる。

一方、言語の変化に関する歴史面、つまり通時態 (DIACHRONY) の研究を含めるか否かについては、多少とも意見が分かれるところである。もちろん、含める場合には、特定の言語に限られる変化の現象ではなく、すべてのまたは数多くの言語の変化にかかわる現象——例えば、音変化 (PHONETIC CHANGE) の規則性、同化 (ASSIMILATION)・異化 (DISSIMILATION) など、意味の上昇 (ELEVATION OF MEANING)・意味の下落 (DEGENERATION OF MEANING) など——が扱われる。反対に、通時面を含まない場合には、一般言語学は記述言語学 (DESCRIPTIVE LINGUISTICS)、つまり共時態 (SYNCHRONY) ——一時期における言語の状態——の研究とほぼ同義になってくる。

次に、個別言語学は除いて、さまざまな種類の言語学、例えば記述言語学・歴史言語学 (HISTORICAL LINGUISTICS)・比較言語学 (COMPARATIVE LINGUISTICS)・構造言語学 (STRUCTURAL LINGUISTICS)・機能言語学 (FUNCTIONAL LINGUISTICS) などの総称として、この用語を用いることも出来るが、その場合には、言語理論や理論言語学の場合と同じように、言語学の研究成果を実際面や関連科学の領域で利用しようとする応用言語学 (APPLIED LINGUISTICS) とは区別されなければならない。したがって、語学教育への適用を前提とする対照言語学 (CONTRASTIVE LINGUISTICS) は、一般言語学から排除されるが、よく似た作業内容の言語類型論 (TYPOLOGY) は、世界の言語の類型 (TYPE) を探し求めると言う意味で、一般言語学に含まれることになる。

ただし、一般言語学は個別言語学と応用言語学に理論的基盤と研究成果の情報を提供し、

逆に両者から理論や仮説の検証結果・有用性に関する情報をフィードバックされるというように、どちらもそれぞれ相互依存関係に立ち、相伴って発展していくべきものである。

上記の一般言語学 (general linguistics) という用語の説明は、その学問が他の学問とかなり関係して成り立っていることが理解できる。また一般言語学に対する説明は非常に詳しく分かりやすいと言える。しかし筆者の抱く疑問点がいくつかあるので順次述べさせていきたい。最初の説明の3行までは、やはり「普遍性」(universality) という概念は個別言語に対して言うのではなく、人間の話すすべての言語に当て嵌まる用語であることが理解される。ただここでちょっと気になるのは、「……理想的には……」という表現が加えられていることである。確信を持つての説明であるならばこのような表現は決して入ってこないのは言うまでもない。このことは人間の言語を考察して完全な普遍性を発見することは容易ではないことを物語っている。

人間の言語と動物の鳴き声との相違は、上記の3行目から6行目までに的確に説明されているように、音素 (phoneme) と形態素 (morpheme) を創造的に組み合わせて無限に語彙を増やして行く二重分節 (double articulation)⁽⁸⁾ 方法にある。しかもその記号命名 (naming) の方法は、Saussure の分析用語で有名でもある恣意性 (arbitrariness) そのものであって、どの言語も特別な規則によって命名されたものではなく恣意的 (arbitrary) であることは言語形成の普遍的な事実である。

上記の説明の6行目から11行目まではまさに哲学的な要素まで必要とされていて言語起源論や言語獲得論にも関係してくるようである。最後には筆者がよく主張する「言語=人間=社会」という説明方式まで追及しなければならなくなるかもしれない。特に Chomsky の提唱した「普遍文法」(universal grammar) は一番脚光を浴びた言語学用語であるが、その仮説はどこまで検証が可能であるかが常に問われている。筆者はこれまでにこの問題についてはいくつかの論文 (梶原: 1997/1998/2000/2003/2004)⁽⁹⁾ の中でかなりの紙面を割いてきている。「言語=人間=社会」という関係式は成立すると確信しているが、「言語生得説=普遍文法」という関係式には筆者は少なからず疑問を抱いている。しかし上記の6行目から11行目までの「一般言語学」についての説明は正鵠を射ているようである。「……より広い領域を含む……」という説明表現はまさに的確で、「一般言語学」という用語を奥深いかつ幅広い内容にしている。

上記の説明の12行目から17行目までの説明もまさにその通りである。筆者はすでに音韻変化 (phonological change) については、印欧語に関する音韻変化の規則性が認知されているならば、世界中の言語の音韻変化に共通してはいなくとも普遍的であるという用語を使用できるのではないかと述べている。そのように述べた根拠は言語に関する完全な普遍性はかなり抽象的な表現でしか説明できないのではないかと考えているからである。つまり「語順」とか「普遍文法」とか具体的な普遍性の表現は、普遍性 (universality) という用語の意味範囲を広げない限り無理ではないか、ということである。

上記の17行目から20行目までの説明はまさにその通りで、「一般言語学」はどちらかと言うと、通時的 (diachronic) というより共時的 (synchronic) な言語分析の際に主に用いられている用語のようである。「普遍文法」(universal grammar) や「語順」(word order) などは共時的な分析方法である。記述言語学 (descriptive linguistics)⁽¹⁰⁾ の分析方法が重要なのである。それは同時に対照言語学 (contrastive linguistics) という用語にも関係していることになる。一般言語学について論じるにはそれぞれの言語を対照的に分析することが必要である。

このような用語の明確さは「上位区分」・「下位区分」という方法で説明することを筆者は提案したい。例えば日本語の文法用語で、「形容詞」・「形容動詞」・「連体詞」などを外国の方々に説明せよと言われた場合、読者諸氏はどのように説明なさるでしょうか。例語で示すならば「大きい」(形容詞)・「綺麗な」(形容動詞)・「大きな」(連体詞)などをどう説明するか、ということである。日本語を学ぶ外国人からすぐに以下のような質問を受けることになるであろう。「形容詞」と「動詞」がどうして一緒に同じ品詞なのですか。さらに「大きい家」と「大きな家」は両方とも名詞の「家」を形容していますが、なぜ前者は形容詞で後者は連体詞なのですか、などの質問である。「連体詞」とはその漢字の意味するところは「体言に連なる＝体言を修飾する」ということである。その本来の漢字の意味する用語を、「活用がなく、体言だけを修飾する品詞」などという本来の漢字の意味に逆らった用語にしてしまった文法家の低次元な分析方法に怒りが湧いてくるほどである。それに加えて「形容詞」という独立した品詞名に対して「動詞」という同じく独立した品詞名をくっつけさせて「形容動詞」などという別個に独立した品詞名などをよくも名づけたものだと、筆者は怒りというより呆れてしまっている。ほんとに困った伝統的な国語学の分析方法である。「連体詞」は体言に連なって、つまり体言を修飾する品詞の意味であって、区分方法では上位区分に位置していて、その下位区分には「イー形容詞」や「ナー形容詞 (形容動詞・連体詞)」がくると説明すれば非常に理解されやすいと言える。このような区分方法による分析をし、日本語の文法用語を再検討すべきであると筆者は強調したい。

次に上記の21行目から30行目までの説明であるが、「……個別言語学は除いて……」という表現はまさにその通りであって、たとえ「普遍性」を求めないとしても、個別言語の研究となるとどうしても一つの言語の文法を主体とした分析になってしまい、それはその言語を習得 (learning) しようとする意図が根底にあって必然的に応用言語学 (applied linguistics) の分野に入ってしまうので、個別言語の研究だけではないことを明記する必要がある。

しかし「さまざまな種類の言語学」という説明表現は一見理解しやすいようにみえるが、その「さまざまな種類の言語学」の範疇に属さない言語学に対してはどのように表現すべきかの問題が残る。「特別な種類の言語学」とでも表現せざるを得なくなる。その特別な言語学の例として応用言語学が例示されている。極端に言うならば、言語習得 (language learning) のための応用言語学 (applied linguistics) 以外はすべての言語学が一般言語学 (general linguistics) であると言わなければならない。このような分類方法は果たして妥当なのであ

ろうか。答えは「いいえ」である。これでは「言語学」とは「一般言語学」であるというのと同じになっている。個別言語の習得方法を論ずる教授方法は言語学という範疇には入ってこないことになってしまうようである。

筆者はこれまでに「用語」の定義について何度もその重要性を主張してきている。この場合も「一般言語学」という用語の「一般」という漢字の意味するところが問題になっているのである。最近の言語学用語では、「一般言語学」(general linguistics)は言語の普遍性(universality)について研究する学問であると理解するようになってきているので、それはそれで用語の定義として納得しているのであるが、「さまざまな種類の言語学」を意味するなどということになると非常に理解しにくい説明表現である。「言語学」(linguistics)とはどのような学問なのかを再度定義する必要があるのではないだろうか。

たしかに「一般的」という漢字の持つ意味は「特別ではない」という意味が根底にあるので、「普通もしくは俗に言われる……」という意味前提で上記の説明がなされているのであれば、「さまざまな種類の言語学」の例として記述言語学・歴史言語学・比較言語学・構造言語学・機能言語学などの言語学が例示されるのは当然である。しかしそこまで例示するならばもっと他の言語学プロパーの周辺に位置する心理言語学(psycholinguistics)、人類言語学(anthropological linguistics)、民族言語学(ethnolinguistics)、コンピューター言語学(computational linguistics)、数理言語学(mathematical linguistics)などの言語学も例示するともっと理解されやすくなるであろう。とにかく21行目から30行目までの一般言語学についての説明は、応用言語学(applied linguistics)以外はすべての言語学が一般言語学という総称で表現されるという説明である。筆者はこのような用語の使用方法には賛同できないことを改めて述べておきたい。つまり筆者の考えは、「一般言語学」(general linguistics)と言う用語は、どちらかというと説明の冒頭にある表現の、「日本語や英語のような特定の言語の研究ではなく、理想的にはすべての人間言語に共通する現象、あるいは少なくとも数多くの系統に無関係な言語にまでまたがって見受けられる現象の研究を、総称したもの」という内容の定義づけをすべきではないだろうか、ということである。

最後の31行目から33行目までの説明はまさに然りで、特に教授法を主体とする応用言語学はその背景にある言語獲得理論(language acquisition theory)がいかに正鵠を射た理論であるかに大きく依存していることを再認識してもらいたい。大きな問題は、構造主義的認識方法と認知主義的認識方法のどちらがより真実性に富んでいるのか、を再検討する必要があると言いたい。特に外国語教育の問題で、言語理論をすぐに応用して「認知教授法」などと称して短絡的に教授方法を算出して、日本語教育や英語教育などで本質的に間違った教授法を行っている教育現状に強く警告を発したい。次に対照言語学(contrastive linguistics)についての説明にも触れておきたい。

[対照言語学の説明]

現代言語学辞典（成美堂：PP.131－132）

二つの言語の部分的体系（音韻・形態・統語・語彙・文字など）の記述を比較・対照し、両者の間の異同を明らかにする研究分野。その比較の方法は、しばしば対照分析（contrastive analysis）と呼ばれる。対照言語学は、歴史的・系統的関係の有無にかかわりなく、原則として二つの言語を共時的に比較するという点において、同一の祖語（PROTO-LANGUAGE）から生じた同系の（COGNATE）複数の言語を通時的に扱う比較言語学（COMPARATIVE LINGUISTICS）とは、根本的に異なるものである。その点、二原語の比較とか比較語学という呼び名はまぎらわしいので、二言語の対照や対照言語学という名称のほうが、最近では好んで用いられる。

対照言語学が発達したのは、米国で構造言語学（STRUCTURAL LINGUISTICS）が隆盛を極めていた1950年代だったので、その部分的な体系の記述は構造言語学的なものから始まり、したがって音素分析（phonetic analysis）による音韻体系（phonological system）の対照が最も多く、形態・統語など文法体系の対照はあまり成果が挙げられなかった。変形文法（TRASPORATIONAL GRAMMAR）の勃興とともに、規則（RULE）の形をとるその文法体系の記述を対照言語学に取り入れる試みがなされたが、次々とモデルが変化することもあって、期待されたほどの成果は得られていない。しかし、日英両語の比較のように、英語を対象とする自国語との対照研究は、世界各国で根強い人気があり、少しずつ地道な研究が行われている。

そもそも対照言語学は、第二言語（SECOND LANGUAGE）や外国語（FOREIGN LANGUAGE）の教授・学習において、学習者の母語（NATIVE LANGUAGE）と学習目標の第二言語／外国語の間の構造上の差異が学習に干渉（INTERFERENCE）を引き起こすので、両語の対照を通してそのような学習の困難点（trouble spot）を予測し、その方面に集中的な訓練を施すことによって、学習効果を高めることを狙いとしていた。しかし、フリーズ（C.C. Fries）やラドー（R. Lado）らの努力にもかかわらず、理論的予測と実践上の困難点とは必ずしも一致せず、そのうち1970年代になって、学習者が実際に犯す目標言語（TARGET LANGUAGE）の誤りを集め、それを類別して原因を探求する誤りの分析（ERROR ANALYSIS）の成果から、対照言語学の理論的不備または偏りが指摘されるようになった。

上記の説明の1行目から8行目までの説明内容はまさにその通りである。説明の中の重要な点は、通時的（diachronic）な研究を対象とする比較言語学（comparative linguistics）に対する共時的（synchronic）な研究をする対照言語学（contrastive linguistics）という相対する言語学の例示で、Saussureの二項対立（dichotomy）の「通時的」（diachronic）と「共時

的」(synchronic) という用語の使用が理解しやすく輝いている。簡単に言えば対照する二つの言語の異同が分析されれば、つまり例示されればそれでよしとする学問である。

次に9行目から17行目の説明は、まさに学問の栄枯盛衰のようなものであって、学校運営で警えるならば人気が無く志望する学生人数の少ない学科は次第に規模を縮小されてしまうのと同じで、学問にもかなり実用的な価値を求められる面が多いことを物語っている。その点世界⁽¹¹⁾の共通語として一番通用している英語は、おそらくどこの国でも一番学習したい外国語であるので、母国語との対照的研究の対象になりやすい外国語であると言える。

最後の18行目から27行目の説明は、応用言語学 (applied linguistics) と対照言語学の関連性がまず述べられている。たしかに二つの言語を比較して相互の異同について分析する場合、その必要性はどこにあるのかという問題でもある。やはり言語の根本的な役割は意味の言語伝達 (communication) にある。手っ取り早く言うならば、語彙的にも文法的にも母語と目標とする外国語または第二言語の異同を認識したいとする実用的要求が原因である。対照言語学 (contrastive linguistics) は母語と目標語との異同、または別の二つの言語の異同の提示のみで大きな役目があるのではないだろうか。しかし、学問をさらにもっと研究に値するような範疇⁽¹²⁾に組み入れようとする、フリーズ (Fries) たちの機能語 (function word) の研究のように機能語の範疇が有意味の語彙の範疇まで入り込んでしまい、機能的な語の研究を対照言語学を発展させる一助となるようにはさせたが、その一方で対照言語学の限界をも曝^{さら}け出してしまったようでもある。

言語の機能に重点を置いた言語研究は、プラーク学派 (Prague School) の学者たちが言語の機能 (function) に重点を置いた構造主義的な考察方法で、その学派の中心的存在であったヤーコブソン (R. Jakobson) によって機能言語学 (functional linguistics) とまで言われるようになり、言語研究の重要な方法論である。フリーズ (Fries) は英語の機能語は154であるとし、従来の品詞 (part of speech) と機能語 (function word) との異同をかなり明確にし、つまり「はい」(yes), 「いいえ」(no), 「どうぞ」(please) などの副詞的範疇を機能語の範疇に入れる、というような新機軸の分析方法を示している点は大いに評価される。

問題は、このような機能語による分析方法が対照言語学 (contrastive linguistics) という学問の発展にどう関わっているのかということと、対照言語学は応用言語学の前提としてのみ存在する言語学なのか、ということである。言語学を実用的にみるならば、どちらも重要であると言える。対照言語学の一つの研究方法として機能語の分析が必要であり、対照言語学は応用言語学には重要な学問分野であると確認できる。

1.2 言語の普遍性

これまでに言語学の下位区分にある一般言語学 (general linguistics) と対照言語学 (contrastive linguistics) について論じてきたが、ここで言語の普遍性とは何かと、言語の普遍性はどのように考察すべきなのか、という問題を明確にしておきたい。

言語の普遍性は、「一般言語学」という言語学用語の説明の項で論じたように、「全部の言語に共通した普遍性」と「いくつかの言語間に共通した普遍性」に分けた考察が最も説明しやすいと言える。さらに上位区分と下位区分という分析用語を用いて説明することを提案しておきたい。以下に完全ではないが言語の普遍性の説明方法を具体的に提示してみるが、表現の不適切もしくは不足な事柄があったら適当に補っていただければ幸いである。

言語の普遍性：

- 1) 言語は音素と形態素の二重分節によって無限に産出される記号である。
- 2) 言語記号の命名は恣意的である。
- 3) 言語には音声と文字があり、音声は文字に優先する。
- 4) 物事ものごとの対象物を説明する際には「文」という文法構造を伴う。
- 5) 物事ものごとを表す名詞に修飾語句をつけることができる。
- 6) 語順がある。
- 7) 機能語がある。
- 8) 格の体系がある。
- 9) 音声に関しては抑揚の体系がある。
- 10) 言語は膠着語的要素と語順によって語彙と文の意味を変化増大できる。

※上記に列挙されている「言語の普遍性」の項目の中には下位区分を有するものがある。普遍性1の下位区分は「膠着語的機能と屈折語的機能を必然的に生み出し、語彙の意味変化と産出のエネルギーになっている」、普遍性2の下位区分は「現実には多くの諸言語の表記法が存在する」、普遍性3の下位区分は「文字の存在しない言語がかなり実在している」、普遍性3の下位区分は「文字には表意文字と表音文字がある」、普遍性4の下位区分は「文法用語で個別言語と個別言語を対照的に分析できる」、普遍性5の下位区分は「類型かつ対照的に言語を分析できる」、普遍性6の下位区分は「類型論的に言語を分類できる」、普遍性7の下位区分は「対照言語学の分析方法に大きな役割を果たすことができる」、普遍性8の下位区分は「文中の名詞という単語に意味を与えることができる」、普遍性9の下位区分は「同一表現の文や語句を音声によって意味を変えることができる」、普遍性10の下位区分は「屈折語は本質的に膠着語的要素が音声的に変化しているにすぎない」、「後置詞や前置詞は本質的に膠着語的要素を有している」などが筆者の言語の普遍性に対する考察である。

1.3 語順の普遍的特性

ここでGreenbergの語順(word order)に対する普遍的特性(universals)についていくつか考察してみたい。まず名詞(noun)の直接的な飾り(modifier)の代表は形容詞(adjec-

tive) である。日本語や英語の場合は、「白い山」(a white mountain) という表現は形容詞の「白い」が名詞の「山」の前に置かれているように、形容詞の語順はいつも名詞の前に位置すると文法的に定義づけられる。この点フランス語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語などのロマンス諸語 (Romance languages) の場合は、特に色彩 (color) を表わす「白い」とか「赤い」などの形容詞は語順が名詞の後に位置される。Greenberg は「形容詞」、「所有格」、「前置詞」、「後置詞」などの例を以下のように考察している。

Greenberg (1863 : P.60) :

Linguists are in general familiar with the notion that certain languages tend consistently to put modifying or limiting elements before these modified or limited, while others just as consistently do the opposite. For an example of the former type, Turkish puts adjectives before the nouns they modify, places the object of the verb before the verb, the genitive before the governing noun, adverbs before adjectives which they modify, etc. Such languages, moreover, tend to have postpositions for concepts expressed by prepositions in English. A language of the opposite type is Thai, in which adjectives follow the noun, the object follows the verb, the genitive follows the governing noun, and there are prepositions. The majority of languages, as for example English, are not as well marked in this respect. In English, as in Thai, there are prepositions, and the noun object follows the verb. On the other hand, English resembles Turkish in that the adjective precedes the noun. Moreover, in the genitive construction both orders exist: 'John's house' and 'the house of John.'

上記の説明では、日本語と同じ膠着語 (agglutinative language) であるトルコ語と主に屈折語 (inflectional language) といわれる英語の共通点を「形容詞」や「副詞」の語順で示し、それに対する言語としてタイ語を対照させている。「前置詞」という点では英語はタイ語と共通点を有するが、「後置詞」という点では英語はトルコ語と共通点を有していない。これらの考察を前提に以下の説明が続いて述べられている。

Greenberg (1863 : PP.60-61) :

More detailed consideration of these and other phenomena of order soon reveals that some factors are closely related to each other while others are relatively independent. For reasons which will appear in the course of the exposition, it is convenient to set up a typology involving certain basic factors of word order. This typology will be referred to as the basic order typology. Three sets of criteria will be employed. The first of these is the existence of prepositions as against postpositions. These will be

symbolized as Pr and Po, respectively. The second will be the relative order of subject, verb and object in declarative sentences with nominal subject and object. The vast majority of languages have several variant orders but a single dominant one. Logically there are six possible orders: SVO, SOV, VSO, VOS, OSV, and OVS. Of these six, however, only three normally occur as dominant orders. The three which do not occur at all, or at least are excessively rare, are VOS, OSV, and OVS. These all have in common that the object precedes the subject.

上記の説明で筆者が取り上げたい内容は、日英語の「前置詞」と「後置詞」の考察と、すでに「0. はじめに」の項で述べた「主語」と「動詞と「目的語」の語順の問題である。「前置詞」と「後置詞」とは五個がどのように異なっているのか、本質的には同じではないだろうか、などという問題である。

「主語」と「目的語」の語順はどちらに優先性があるのか、あるならばそれは何故なのか、などが問題となる。また語順 (word order) という点での普遍性 (universality) があるならば、それは具体的にどのような語順についてなのか、などを考察する必要がある。Greenbergはこの語順の普遍性については、「普遍的特性」(universals) という用語を用いて次々と言語の普遍性を例示している。世界中の言語をよくこれまで詳しく調べたものだと敬服している。まず「語順」の「普遍的特性」の第一号は以下の表現になっている。

Greenberg (1863 : P.61) :

Universal 1. In declarative sentences with nominal subject and object, the dominant order is almost always one in which the subject precedes the object.

このような「普遍的特性」はすべての言語の「語順」に当てはまるのかというやはり例外があるようである。OregonのPenutian languagesであるSiuslawとCoos, それにSalishan languageのCoeur d'Aleneは例外 (exceptions) であると上記の説明に「注釈」がついている。しかし、世界中のほとんどの言語が「主語」が「目的語」より語順が優先するならば、それは「普遍性」(universality) があると言い切っても良いのではないだろうか。ただ例外 (exceptions) は何かを論じている際の反例 (counterexamples) となり、本来は理論が成り立たなくなるものである。この点が普遍性を追及する際に常に生じてくる問題なのである。

類型論 (typology) 的に言語を考察した場合のGreenbergの「語順」に対する普遍的特性 (universals) を述べてきたが、上記以外にまだ6つあるので以下に全部列挙するのを許されたい。

Greenberg(1863 : PP.62-63) :

Universal 2. In languages with prepositions, the genitive almost always follows the governing noun, while in languages with postpositions it almost always precedes.

Universal 3. Languages with dominant VSO order are always prepositional.

Universal 4. With overwhelmingly greater than chance frequency, languages with normal SOV order are postpositional.

Universal 5. If a language has dominant SOV order and the genitive follows the governing noun, then the adjective likewise follows the noun.

Universal 6. All languages with dominant VSO order have SVO as an alternative or as the only alternative basic order.

Universal 7. If in a language with dominant SOV order, there is no alternative basic order, or only OSV as the alternative, then all adverbial modifiers of the verb likewise precede the verb.

上記の説明を見れば容易に理解されるように、「条件」の意味を有する接続詞の「If」や前置詞の「with」を用いて「前置詞」、「後置詞」、「形容詞」、「副詞」、「所有格」などの類型的な語順に「普遍的特性」(universal)を与えている。このことは言語の完全な普遍性を述べるのがいかに難しいかを物語っている。これらの説明の中で語順というよりも「前置詞」と「後置詞」の有無によって「所有格」(＝属格)の語順に普遍的特性を与えているのも苦勞しているところである。

ここでちょっと用語について少し紙面を割かせていただきたい。これまでに「形容詞」とか「所有格」などと簡単に用語を使用して論じているが、ラテン語やギリシャ語の文法では「形容詞」は「名詞」という品詞の一部分として説明されていたし、「所有格」(＝属格)にも大きく分けて「限定属格」と「独立属格」があり、特に「限定属格」は下位区分に「個別化属格」と「種別化属格」に分けられていて、「個別化属格」の下位区分はその意味関係から「所有」、「主語」、「目的」、「同格」、「部分」などがあり、また「種別化属格」は記述属格のことで「属性」、「尺度」、「起源」、「材料」などの意味記述が可能である。言語の意味の曖昧性(ambiguity)という点で「ジョンの肖像画」(John's portrait)は、「ジョンが画いた肖像画」(a portrait by John),「ジョンを画いた肖像画」(a portrait of John),「ジョンの所有する肖像画」(a portrait John's)などの意味を有しているということである。

いずれにせよ言語の語順による普遍性 (universality) の追求は、普遍的特性 (universals) と言う点でかなりの成果があったと言える。Greenberg はさらに統語論 (syntax) や形態論 (morphology) でもかなりの普遍的特性 (universals) を考察している。ここでは類型論的な語順の分析だけにして、次の項目に話を進めさせていただきたい。

2. 類型論的分類について

類型論 (typology) 的に日本語と英語をここでちょっと触れてみることを許されたい。日本語は膠着語 (agglutinating language) で英語は屈折語 (inflectional language) であると言われている。しかし英語は屈折語だけではなく、膠着語や孤立語 (isolating language) の特徴も同時に兼ね備えている。類型論 (typology) 的分類にはこれらの他に抱合語 (incorporating language) という用語もある。膠着語と屈折語の説明をもう少し詳しく論じてみたい。

2.1 膠着語

一般言語学 (general linguistics) や対照言語学 (contrastive language) の場合と同じように以下に順次説明を引用することを許されたい。

[膠着語の説明]

現代言語学辞典 (成美堂 : P.19)

言語類型の一つ。実質の意味を示す独立の語に文法的意味をもつ接辞が添えられて、文法的機能が果たされる言語。日本語やトルコ語がその例である。日本語「少年は少女を愛する」において、主語と目的語は格助詞 (接尾辞) によって表わされている。これに対して、ラテン語 *puer puellam amat.* (少年は少女を愛する) の *puer* (少年は) (主格), *puellam* (少女を) (対格) においては、語彙的な意味を表わす部分と文法的な意味を表わす部分が密接に結合している。

[膠着の説明]

現代言語学辞典 (成美堂 : PP.19-20)

語または語幹に接辞または付属語をつけて、文法関係を表わすこと。例えば、「私の邸宅の裏通りからアジアが始まる」では、下線部の要素によって所属・位置・起点・主体などの文法関係を表わしている。また、トルコ語の *elim* (私の手), *elimde* (私の手の中で), *elimden* (私の手から) は、*el* (手) (単数) にそれぞれ斜体部の要素がついて、所

属・位置・起点などの文法関係を表わす。

膠着が発達している言語として、アルタイ諸語、フィン・ウゴル諸語、朝鮮語、日本語などが挙げられる。トルコ語は、ここの要素の境界が比較的明確で分節が容易な例である。他方、日本語の「見た」「書いた」「言った」「読んだ」などでは、過去を示す要素が異形態 (ALLOMORPH) をもち、また先行する動詞に異なる特定の活用形が要求されるなどの点で、結合の程度が高い。

一般に膠着の接辞は語尾に来ることが多いが、バントウ諸語のように語頭につける例もある。現代英語の He sailed from Dover to Calais. (彼はドーヴァーからカレーに船で行った) の下線部の要素は、語の前に位置しているが、これは日本語などの膠着に相当する。

上記の説明は非常に理解しやすく書かれている。これらの説明の中で筆者が一番必要とする箇所は、英語の「前置詞」と日本語の「後置詞」に関する説明で、膠着の接辞 (affix) が英語の場合は語頭にくるのに対して日本語は名詞の語尾にくる、という内容のところである。英語は古英語から近代英語になる過程で屈折の特徴をかなり失った語形変化をしてきている。英語は日本語と同じように語尾に接尾辞 (suffix) をつけて語彙の意味を広げていく膠着語の特徴と、すでに「0. はじめに」の項で例示したように語順 (word order) によって意味を変化させることができる特徴を兼ね備えている。例えば love (愛する), lovely (愛らしい), loveliness (愛らしさ) などはまさに膠着語の特徴を表わしている。John loves Mary. (ジョンはメアリを愛している) と Mary loves John. (メアリはジョンを愛している) は語順によって意味が変化する。

さらに「副詞」の膠着的な特徴をここで加えることを許されたい。日本語では「副助詞」などとおかしな名称がついている「も」や「は」などと英語の「also」を、以下に対照的に例示するので参考にさせていただきたい。

(1) A : ジョンはジェーンを愛しています。

(John loves Jane.)

B : ジョンはメリーも愛していますよ。

(John loves Mary also.)

(2) A : ジョンはジェーンを愛しています。

(John loves Jane.)

B : ブルースもジェーンを愛していますよ。

(Bruce also loves Jane.)

読者諸氏は上記の「副助詞」と言われている「も」(also)を考察して、「も」(also)が動詞の「愛する」に焦点を当てて発話されている語であるとお考えになりますか。あるいは動詞の「愛する」を修飾していると思いますか。筆者の考察は、この助詞(副助詞ではない)はまさに膠着語的に用いられていて日本語も英語も付着した前の名詞(noun)に常に焦点が当てられていて、動詞にはまったく焦点が当てられていない、という考察である。従来、国文法で「副助詞」などという「副詞」と「助詞」をくっつけた用語は、「形容詞」と「動詞」をくっつけた「形容動詞」などという矛盾した用語と同じように、まったく間違った用語なのである。副助詞と言われる「は」も同じことである。

ここで言語の普遍的特性(universal)を筆者は一つ加えておきたい。新しく加えるというのではなく、すでに項目「1.2 言語の普遍性」のところの「普遍性10」で述べている内容の補足説明である。上記の膠着語の説明と考察の中で明確になっているのは、これは人間の言語の二重分節(double articulation)の普遍的特性に本質は関連しているのであるが、ある対象物を記号化したりまたその対照物(=記号)を説明したりする場合に、人間はその元になる記号である語基(base)⁽¹³⁾を説明するために接辞などの飾り(modifier)をその都度付着させて意味変化と語彙の増大をしようとする本能的な特徴を持っていると言える。この言語記号化の根本的な特徴は、二重分節(double articulation)の要素でもあるこの膠着語的特性が多種の言語記号を無限に増大させていくエネルギーである、という考察である。次に屈折語(inflexional language)の説明に話を移したい。

2.2 屈折語

[屈折語の説明]

現代言語学辞典(成美堂:P.304)

言語類型の一つ。語の実質的意味を表わす部分(語幹)と文法的意味を表わす部分(屈折要素、語尾など)が密接に結合して、分離できないような言語。語の語形そのものが文中に置ける機能を果たす。印欧諸語やセム語がその典型である。ラテン語 *dominus filiam amat*。(主人は娘を愛する)において、*dominus*(主人)はそれだけで単数の主格であることを表わし、*filiam*(娘を)はそれだけで単数の対格であることを表わす。英語は、文法的語形変化つまり屈折(INFLECTION)が簡単になってしまったために、ラテン語の類型とは非常に異なったものになってしまったが、*drink-drank-drunk*や *man-men*などに、屈折語の面影が残っている。日本語は、普通には膠着語(AGGLUTINATING LANGUAGE)とされているが、動詞「書く」の活用形 *kaku-kake*などは屈折語的である。

[屈折の説明]

現代言語学辞典（成美堂：P.303）

語が文法的機能を果たすために行う語形変化のこと。屈折には大別して、接辞（AFFIX）の添加によるものと、母音（稀に子音）またはアクセントの交替によるものがある。後者を内部屈折（internal inflection）と呼ぶことがある。接辞による屈折は、語頭屈折（pre-flection）・語中屈折（intro-flection）・語尾屈折（post-flection）の三つが区別される。いわゆる屈折語（inflectional language）の代表とされる印欧諸語は、語尾屈折が中心である。英語 *trees*（木）（複数）；ドイツ語 *Menschen*（人）（複数）；フランス語 *bateaux*（船）（複数）など、ただし、ラテン語の *amabo*（私は愛するだろう）（*amo* の直説法一人称未来形のように、語中屈折の例もある。古典語文法を模範とする屈折を曲用（DECLINATION）、動詞の屈折を活用（CONJUGATION）と呼んで区別している。

（内部屈折の説明は省略）

屈折をもつ言語の記述に際して、伝統的に行われる手法の一つとして、強変化（strong conjugation）・弱変化（weak conjugation）という区別がある。前者は比較的語形変化の大きい型を、後者はそれが小さい形を指す。印欧語族の中でも屈折をあまり用いなくなった近代英語では、動詞に残っている屈折を一般に不規則変化（irregular conjugation）と規則変化（regular conjugation）に二分する。前者は語中屈折などの型を、後者は語尾屈折の形を指す。

上記の説明で筆者にとって重要な箇所は、屈折語と膠着語の本質的な違いではなく、本質的に同一の言語生成を物語っている表現で、つまり屈折語的要素を次第に失ってきている英語の説明と、膠着語とされている日本語の動詞「書く」の活用形は屈折語的である、という重要な説明である。

筆者の主張したいことは、言語の普遍性（universality）を考える場合に必要なのは人間の対象物に対する認識方法が基本にあるということである。言語起源論に関係してくるが、人間はまず対象物を恣意的に命名あるいは記号化し、その次にその対象物の状態（動態・静態）を説明し始める。

そこでまず動態的な言語表現をする場合に、しかもそれが自動詞的行動の表現を言語化する場合には、文法的に対象物である主語を述べ次に行動として何かをする自動詞をすぐに語順として述べるのが自然である。つまり SV 構文である。しかし VS 構文もありうるだろう。ただここで主張したいことは対象物である主語に間を置かず自動詞を発話するであろうというこ

とである。この自動詞の場合の語順は膠着語であれ屈折語であれ大きな差異はない。すべて自動詞的表現で物事が表現できるならば諸言語の間に文法的差異は存在しないが、他動詞を使用するようになると対象物の認識の仕方に根本的な差が生じてくる。それは語順という点での差異である。他動詞を用いるということは必然的に他動詞の主語となる名詞または名詞句と他動詞の行為が及ぶ目的語となる名詞または名詞句である。人間の認識方法は、主語の行為の方に焦点が当てられるならば主語の次にすぐに動詞が用いられるが、行為の対象となる目的語の方に焦点が当てられるならば主語の次にすぐに目的語がくるであろう。つまり語順が SVO になるのか、あるいは SOV になるのかの差異が生ずる。「0. はじめに」の項で例示したように、英語などの SVO 型の言語は語順によって他動詞の行為の及ぶ方向を語順で表現し、それに対して SOV 型の言語は目的語に膠着語である「後置詞」(postposition) か「屈折」(inflection) を必要としている。時制 (tense) の場合にも膠着語である日本語などは助動詞の「た」を付着させるが、屈折語ではそれを屈折させることで表現しようとしている。

筆者が何をここで主張したいのかを改めて言い換えるならば、上記の「屈折」の説明の中で日本語は普通に膠着語とされているが動詞の「書く」などは屈折語的であるという分析にもあるように、本質的には「屈折」は「膠着」の下位区分にあるのではないだろうか、というのが筆者の言語類型論 (typology) に対する新しい考察である。人間はその言語表現において、ある対象物を説明しようとするときできるだけ「膠着語」的に表現する普遍的な認識方法を有しているのではないか、という主張である。

3. 後置詞と前置詞について

日本語は膠着語 (agglutinating language) で、しかも SOV という語順からも Greenberg が考察しているように必然的に後置詞 (postposition) が必要な言語である。これに対して屈折語 (inflectional language) と膠着語や孤立語 (isolating language) などの特徴を兼ね備えた英語は前置詞 (preposition) を必要としている。以下の両者に対する説明を参照されたい。

3.1 後置詞の特性

[後置詞の説明]

現代言語学辞典 (成美堂 : PP.512—513)

品詞 (PART OF SPEECH) の一つ。小辞 (PARTICLE) の一つで、他の語 (句) と語 (句) の文法的関係や場所・時間の関係などを示すもの。前置詞 (PREPOSITION) に対する。

後置詞は、ウラル諸語に典型的な例がみられる。例えば、フィンランド語には多数の後置詞と少数の前置詞があり、大部分の後置詞は名詞の属格 (GENITIVE) の後に置かれる。

例：Hotelli on aseman *edessäi*. (ホテルは駅の前にある) など。このほか、属格に続く後置詞には、*alla* (～の下に), *alle* (～の下へ), *alta* (～の下から), *kanssa* (～とともに), *päälä* (～の上に), *päälle* (～の上へ), *päältä* (～の上から), *takana* (～の後に), *välillä* (～の間に) などがある。分格 (partitive) に続く後置詞には、*kohtaan* (～に対して), *varten* (～のために) などがある。また、ハンガリー語の後置詞は、主格の名詞・代名詞に続いて用いられる。

(例省略)

日本語や朝鮮語の助詞も、後置詞の一種である。ただし、日本語の「人が」「人に」「人は」「人も」や朝鮮語の *sara-'i* (人が), *saram-'wig i* (人に), *saram-'wn* (人は), *saram-do* (人も) などの助詞が独立の語であるかは、意見が分かれるところである。

英文法などでは、前置詞が統語上その支配する名詞に位置したり、文・節の末尾に置かれた場合に、その前置詞を通常の用法特別して後置詞と呼ぶことがある。

例：He was laughed *at* by many people. (彼は多くの人々から笑いものにされた), All this they liked him *for* and visited his house. (このために彼らは彼が好きになり、彼の家を訪れた), She is the person you talked *about*. (彼女が君の話していた人だ) など。

上記の説明で筆者が問題にしたいのは、後置詞が独立している語なのかどうか、と英語の場合も前置詞と後置詞の特徴を兼ね備えているという箇所である。特に日本語の後置詞 (post-position) の分析ではそれぞれの持つ固有の意味の関係から、従来の国語文法や学校文法などでは「は」や「も」は副助詞であるとしている。この「副助詞」という用語も「形容動詞」とか「連体詞」などと同じように矛盾した用語で、筆者が何度もこれまでに「用語の定義」ということで問題提起していることである。「助詞」は「助詞」であって、別の品詞の「副詞」と重ねて使用すべき用語ではない。

改めてこの「区分」による分析法を提示すると、「文法用語」と「意味用語」を明確にして「上位区分」に「文」(sentence), その下位区分に「主部」(subject) と「述部」(predicate), これらの下位区分に「主語」, 「述語 (動詞語)」, 「目的語」, 「補語」, 「修飾語」などがあり、さらにそれらの下位区分に「名詞句」, 「動詞句」, 「形容詞句」, 「副詞句」などがあって、そして最後の下位区分に「名詞」, 「動詞」, 「助動詞」, 「形容詞」(イ-形容詞・ナー形容詞), 「副詞」, 「助詞」などがある、という用語区分方法である。このような「文法用語」と同じレベルで、「意味用語」の「主題」とか「話題」とか「命令」とか「疑問」とか「感嘆」などを用いてしまうと、「象は鼻が長い」(An elephant has a long nose.) という文の説明を、「象」(ele-

phant)は「主題」(theme)あるいは「話題」(topic)で「主語」(subject)は「鼻」(nose)である、などとまったく正鵠を射ていない、間違った分析方法がまかり通っているのである。このような間違った分析が生じてしまう根本原因は、毎回筆者が論文のどこかの箇所で強調しているように、「文」(sentence)の定義が未だに世界中で決定されていないことにある。あらゆる辞書の「文」(sentence)という項で調べていただければ用意に理解されるようにその説明は千差万別である。また同じことを繰り返して恐縮であるが、「上位区分」・「下位区分」と言うように同じレベルでの用語の使用方法をきちんと守ることが重要である。上記に述べた「象は鼻が長い」の間違った分析のように、このような正鵠を射ていない分析方法が学校文法で未だに教えられていることに筆者は憤りさえ感じている昨今である。「主題」とか「話題」は意味用語であって「主語」とか「動詞」とか「目的語」などの文法用語と同じレベルで用いてはならないのである。同じレベルで用いた瞬間にすでに分析は間違った方向に行ってしまうことを再認識すべきである。次に英語の「前置詞」についての説明を引用することを許されたい。

3. 2 前置詞の特性

[前置詞の説明]

現代言語学辞典 (成美堂：PP.520—521)

品詞 (PART OF SPEECH) の種類の一つ。英語の preposition という名称は、ギリシャ語の prothesis のラテン語訳である。日本語の名称も、この原義をそのまま翻訳したものになっている。後置詞 (POSTPOSITION) に対する。

前置詞の定義は、一般的に言えば、他の語句の前に置かれる語となる。これは文中の位置に言及しているだけで、機能・形態・意味などにはまったく触れていない。このような名称の品詞は前置詞のほかには間投詞 (INTERJECTION) ぐらいのものである。もう少し具体的に規定すれば、小辞 (PARTICLE) の一つで、他の語 (句) の前に置かれて、主として語 (句) と語 (句) の文法的関係を示すものといえよう。ただし、このような規定は、他の品詞と同様に、原則的かつ便宜的であって、決して包括的ではありえない。明確なことは、前置詞には屈折がなく、語彙の意味よりも文法的機能に中心がある点である。

前置詞の主な機能は、名詞・代名詞またはその相当語句の前に置かれて副詞句や形容詞句を作ることである。この場合、前置詞は名詞・代名詞を支配するといひ、名詞・代名詞は被支配語 (REGIMEN) と呼ばれる (英文法ではしばしば目的語と呼ばれている)。また、ラテン語やギリシャ語などの前置詞は、動詞と結合して複合動詞を作る。この場合、前置詞は一種の接頭辞のような働きをする。近代ドイツ語などにも、このような形式を見出すことができる。例：*aufsehen* (見上げる)、*übersehen* (見渡す) など。

(説明省略)

前置詞の位置は、その名のとおり被支配語の前が原則であるが、いろいろな理由で後置詞の場合もある。例：What are you looking *for*? (何を探しているのか)、That was the only thing to write *with*. (それが唯一の書く道具だった)、The boy was well taken care *of*. (少年は十分な世話を受けた) など。

上記の説明で重要な箇所は、まず4行目と5行目の「前置詞の定義は、一般的に言えば、他の語句前に置かれる語となる。これは文中の位置に言及しているだけで、機能・形態・意味などにはまったく触れていない」という箇所である。まさにその通りであって「語順」の位置関係を説明しているにすぎない。

次に重要な箇所は7行目～10行目の「……他の語(句)の前に置かれて、主として語(句)と語(句)の文法的関係を示すものといえよう。……。明確なことは、前置詞には屈折がなく、語彙の意味よりも文法的機能に中心がある点である」という箇所である。前置詞が屈折語でないのは確かである。しかし、前置詞ははたして文法的関係を示すことが主たる機能なのであろうか。また語彙の意味よりも文法的機能に中心があるのであろうか。筆者の考察はまったく逆である。前置詞は膠着的特性を持ち、文法的機能というよりも意味的機能を有していると断言したい。文法的機能は語順以下であるとも言える。その理由の根底には前置詞は膠着的特性を有していると考察しているからである。

11行目～15行目までの説明で重要な箇所は、「……副詞句や形容詞句を作る……」と「……前置詞は一種の接頭辞のような働きをする……」という分析である。これらの説明は前置詞がまさに膠着的特性を帯びていることの実証にもなっている。

そして最後の段落の説明で、「前置詞の位置は、……、いろいろな理由で後置詞の場合もある」という箇所、前置詞は本質的には日本語などの膠着語的特性を有していると言えよう。

3.3 後置詞と前置詞の普遍性

これまでに膠着語・屈折語・後置詞・前置詞などについて考察してきているが、もうすでに論じてきたように「後置詞」も「前置詞」も本質は「膠着語」としての特性を有していると言える。これは言語の特性であって、類型論的には膠着的要素をどの言語も持っていると言いたい。つまり屈折的特性も本質は膠着的な働きがあってそのような語形変化を生じてしまっただけのことである。両者の普遍的特性(universal)はどちらも膠着的特性を有していて、名詞の後に付着するかそれとも名詞の前に付着するかで、文法的な機能というより語彙的な機能を持っていると言える。

4. おわりに

本論文は言語に対する認識論が根底にある。また筆者がこれまでに何度も主張してきている専門用語の定義の重要さも論じている。言語の普遍性 (universality) という点では、類型論 (typology) 的にみた語順 (word order) による普遍的特性 (universals) を Greenberg の考察を参考に論じ、言語の「普遍性」(universality) に関する10項目の考察を提示している。それらの考察の背景となる分析を後半の項目の中で順次論じている。さらに言語学 (linguistics) ・一般言語学 (general linguistics) ・対照言語学 (contrastive linguistics) ・膠着語 (agglutinating language) ・屈折語 (inflectional language) ・後置詞 (postposition) と前置詞 (preposition) などの用語について論じ、同時に言語の膠着的特性が類型論的な分析の中で上位区分に位置しているという、言い換えるならば膠着語は屈折語や孤立語などの上位区分にあるという新説を提示している。言語の本質を多種の用語を論じる中でその普遍性を追求した論文であると言える。読者諸氏の言語観に僅かでも参考になれば幸いである。

(注)

- (1) 言語の普遍性 (universality) と言えばまず何を措いても Chomsky の言語生得説 (innateness hypothesis) と普遍文法 (universal grammar) という用語があまりにも有名である。
- (2) 語順 (word order) という用語は Bloomfield の用語の配列 (arrangement) の一つである順序 (order) のことである。
- (3) Bloomfield, Leonard. (1933 : P.163) 参照。
- (4) 格助詞：文中の体言に付き、他の語との意味上の関係を示す機能を有する語である。
- (5) 「主語の優先性」：日本語のように意味関係を決定づける格助詞を持たない言語では、他動詞よりも前に順序が置かれるのを前提とするならば、先に置かれた名詞が主語になると明示できよう。世界の言語全部に当てはまることではないが、SVO の語順を有する言語にはこの「主語の優先性」という定義はかなりの重要性を帯びていると言える。
- (6) Greenberg, J.H. (1963 : PP.58-90) 参照。
- (7) Saussre の言語分析の根幹をなしている二項対立 (dichotomy) という二分法の片方の用語で、この通時的 (diachronic) という用語に対するものは共時的 (synchronic) である。歴史上の言語変化に対して現時点での言語変化の分析の重要性を Saussre は主張し、そこから新しい言語学という「学問が誕生したと言える。彼は「言語学の生みの親」でもある。
- (8) 二重分節性 (double articulation) とは、例えば日本語なら形態素の「か」([ka] : 火, 課, 科, 蚊, 可, 過……) と最小の意味を有した記号があり、さらにその形態素を分析すると音素の [k] と [a] から成り立っていることが分かる。このように形態素による一次分節と音素による二次分節によって無限に言語を創造していくことができる。このような分節構造を二重分節と称している。
- (9) 参照：梶原 (1997) 「言語生得説と英会話教育」文京女子短期大学英語英文学科『紀要』論文。
梶原 (1998) 「言語の普遍性：命題とモダリティについて」文京女子短期大学英語英文学科『紀要』論文。
梶原 (2000) 「語彙教育の重要性について」文京女子短期大学英語英文学科『紀要』論

文。

梶原 (2003) 「語彙力と会話力の相関関係について」文京学院大学外国語学部・文京学院短期大学『紀要』(2号)論文。

梶原 (2004) 「言語記号認識と言語習得の関係について」言語人文学会誌『言語と人間』(7号)論文。

(10) 記述言語学 (descriptive linguistics) は通時言語学や歴史言語学などに対する学問で、母語の話し手の現に話されている発話に焦点を当ててその資料を収集し、音韻・形態・頭語などの分野から個別言語の全体的な体系を考察する学問である。

(11) 梶原 (2004) 「共通語と英語教育について」文京学院大学外国語学部・文京学院短期大学『紀要』(3号)論文を参照。

(12) Fries の用語で、文の中で文法的な機能を有するが、語彙的な意味をほとんど持たない語のことを言う。

(13) 語基 (base) とは通時的な語根 (root) とは異なって共時的な研究のための用語で、語の構成要素からあらゆる接辞を取り除いた後に残る記号部分のことである。

参考文献

『現代言語学辞典』成美堂

『新英語学辞典』研究社

『ソシユール小事典』大修館書店

『チョムスキー小事典』大修館書店

『日本語大百科事典』大修館書店

Bloomfield, Leonard. (1933). *Language*. New York: Holt, Rinehart & Wilson.

Fries, C.C. (1940a). *American English Grammar*. New York: Appleton-Century-Crofts.

Greenberg, J.H. (1963). *Universals of Language*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.

梶原 (2003) 「語彙力と会話力の相関関係について」文京学院大学外国語学部・文京学院短期大学『紀要』(2号)論文。

梶原 (2004) 「言語記号認識と言語習得の関係について」言語人文学会誌『言語と人間』(7号)論文。